

7月24日(日)

いろいろご用意しております

寿司8貫

5000 (税込)
円

昨日はたくさんのうなぎのご注文
ありがとうございました。
感謝を込めて久々にやります!

 **西田鮮魚店**

ジョイフル

☎72-5246

専用番号 ☎090-7125-5489 〈御用聞き便(旧庄原市内はご自宅に配達)〉

『壁の先には壁しかない』

羽生結弦』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史

1979年(昭和54年)7月19日。

ジョイフルながえがオープンした日。

あれから43年が過ぎました。あの年に生れた赤ちゃんが43才です。27才の青年だった私も70才。

今は昔、というほど古くもないのですが、心情的にはそんな感じがします。今は昔……。

あの日、店に立っていたのは、私とすぐ下の弟の善彦と彼の妻のみどりさんと末弟の篤生と、立川さんというパートの女性一人に、3日ほど手伝ってくれた50代の男性、冷蔵庫を納品してくれた業者の男性の、しめて7人でした。

すぐに善彦夫妻と立川さんと私の4人になり、篤生は市役所前の店で父と母と仕事。私と篤生は仕入れもあるので、昼は抜けて夕方からまた、店に入ります。家族だけでの営業。売上は少ないのに、みんななくたくた。先が見えない不安と疲労とでしんどかった。

3カ月くらい経って、篤生の友人の正畑さんが入り、広島で魚屋に勤めていた小谷さんが入り、やっと布陣が整い売上が上がり始めます。アルバイトの高校生も土・日に入ってくるようになって、ジョイフルに出店して良かったと思えるようになりました。それまでは、とてもとても。

ここからすべてが始まった。そんな気がします。人の大切さを教えられたスタートでした。

営業も安定して楽になったにも関わらずというか、楽になったからというか、4年後、『花車』を出店。案の定、なかなか利益が上がらず、また、次に打つ手も見えず、悶々としながら年を重ねました。まだ、30代前半です。やる気と元気に充ちていましたからね。

ジョイフル開店から10年後、回転寿司に出会い、三次に『すし家族』をオープン。これも、立ちあがり、人が揃わず困りました。でも、こつこつ積み重ねればなんとかなるもの。このころから社員が増え、人が育ち始めます。

そして、ジョイフル開店から20年後、満を持して、『すし鮮』『すし辰』の展開を始めました。こちらは、今までとは打って変わって、いきなりのロケットスタート。とんとん拍子で売上が上がり、名前も売れ、出店に拍車がかかりました。行け行けどんどんです。

『カルビ屋大福』『鄙の料亭 地御前』と魚以外にも手を広げます。しかし、人が育たない中での出店は禁物。折からの人手不足もあり、ご多分にもれず苦戦。閉店する店も出て来ます。

それでも、出店を続ける中で、コロナ禍。ジョイフル店以外は売上は半分以下。どうなるものかと、息をのむ日々でしたが、国の補助金と金融機関の支援で命を繋ぎました。

そんな中でも、歩を止めればそこまでと、新しい道を模索。勇を鼓して『とんかつ日刈り』『ミートファクトリー お肉の工場直売所』と、お肉の世界にも挑戦を始めました。

そして今、とりあえず、この2〜3年はじつとして……、と社長を委ねた息子と話しています。

7月20日(水)の中国新聞。一面のトップ。

『羽生が競技引退』と大見出しがあり『限界への挑戦 これからも』とありました。

私も彼が金メダルを取った『SEIMEI』には大感動し、彼の生き方に学ぶところが大きかった。世界の頂点に立っただけでなく、そこを突き抜けて、羽生結弦だけの世界を創造した天才に比べるべくもありませんが。

『壁の先には壁しかない。人間とはそういうもの。課題を克服しても人間は欲深いから、また越えようと思う。』

『壁の先には壁しかない』。良いこと言う。さすが羽生。箴言だ。

70年間を振り返ってみて、ずっとそうだったし、これからも、そうに違いない。違うのは、壁の高さと、壁の厚さと、壁の質。羽生結弦とは、それが違う。圧倒的に違う。

しかし、それはそれ、一人一人、例外なく『壁の先は壁』なのだと思う。欲深いという向上心からだけではなく、人は年を取り、時代は変わる。自然に壁はそこにある。一個所に留まりたくても、留まることなどできない。

壁を越えるのか。突き破るのか。回り道を探すのか。壁の前に立ちすくむのか。例え、背を向けても、そこにも壁がある。なら、挑むしかない。生きるということは、そういうことだったと思います。

仕事の壁もたくさんあった。ジョイフルのオープンの日からずっと、壁に挑み、壁に弾き飛ばされながらも、いつの間にか壁を越えていた、それを繰り返す。それでここまで来た。そんな感じの70年でした。

さて、70才からの私の壁?只今、それに挑戦中です。

